

1 章 絵本・紙芝居と理解

1. 1 絵本の歴史

平安時代 → 「源氏物語絵巻」「鳥獣人物戯画」

江戸時代 → 「桃太郎」「猿蟹合戦」「花咲爺」などの物語絵本

昭和 → 保育絵本、飛び出す絵本などの仕掛け絵本

第二次世界大戦後、急速に普及

1. 2 絵本の現状

絵本に関する最近の動向

- ・ C D 付きの絵本や玩具付きの絵本など、絵本の新しいメディアが現れてきた。
- ・ 大人の間でも読まれるようになった。
- ・ 絵本を読書療法に用いる実践がなされるようになった（老人施設での読み聞かせなど）。
- ・ 自治体や家庭での絵本の読み聞かせを支援する取り組みが広がっている。

2. 絵本の理解（絵本の魅力）

●対比と繰り返し

相反する性格や行動などを対比させつつ、それぞれの絵本の筋の間で、きわめて異なった結末を対比させている。

Ex. 「こぶとりじいさん」「三匹のこぶた」「舌切り雀」

●リズム

リズムカルな言葉遣いが用いられている。

Ex. 「ぐりとぐら」

リズムカルな言葉遣いが用いられている絵本を読み聞かせることは、子供の発達にとって肯定的な効果をもつ場合が多いと考えられているが、心理学的に検討した例はない。

●読み聞かせ

読み聞かせが子供に与える影響（欧米での研究結果）

1 歳から 3 歳頃の読み聞かせの頻度が、幼児期から児童期前半の子供において、語彙能力の獲得や言語能力の発達をある程度まで予測する。 ⇒ 肯定的な効果がある。

3. 紙芝居の歴史と現状

歴史

紙芝居の原型 → 19 世紀初頭に、寄席芸人の亀屋都楽が外国の幻灯をもとに創始した写し絵（錦影絵）にあると言われる。

街頭紙芝居 →現在と同様の紙芝居。街頭で子供たちを相手に演じる。

教育紙芝居 →宗教教育、幼児教育、学校教育の分野で採り入れられた紙芝居。

（戦時中）「国策紙芝居」

（戦後）「民主主義的紙芝居」「丹下左膳」「ライオンマン」

＊街頭紙芝居は、テレビ放送が普及したことを契機に急速に減少（1950 から 1960 年代）

紙芝居に関する最近の動向

- ・紙芝居を老人施設などで演じる実践がなされている（絵本の読書療法と同じ）。
- ・外国に紙芝居を輸出する試みがなされている。

4. 紙芝居の理解

●集団性

紙芝居は、絵本の場合よりも集団で享受することが多い。

- ・観客同士の共感や、演者と観客との間の共感が生まれる。

●双方向性

紙芝居の演者は、観客の反応を見ながら説明に工夫を施す。

（絵本も、一人の読み手と一人の聞き手という意味で双方向性がある。）

●非操作性

画面の移行は、観客の意図と関わりなく演者が行う。

- ・場面転換を容易にさせるので、観客の想像性をかきたてることが可能である。

（絵本の場合は、ページの移行は読み手の意図次第であるので、操作性がある。）

●選択性

紙芝居の場合、見たい時間に自由に見ることができるとは限らないので、絵本の場合より選択性の程度が弱い。

5. 今後の課題（絵本、紙芝居、テレビに関して）

- ・子供の発達との関係の中で、それぞれのメディアが社会にもたらす影響をより明確にしていく必要がある。
- ・子供の様々な発達にとって、“すぐれた情報メディア”とは何かを明らかにすることが必要である。

メディアの特性

*絵本と紙芝居（双方向性、選択性、聴覚性）

視覚的情報は少数の静止画面からのものに限定されているので、聴覚的情報の方が、子供の様々な発達に対する影響度が強い場合が多い。

*テレビ（一方向性、非選択性、情報性、アクセス性）

絵本、紙芝居の場合と比較して、一定の時間内で得られる視覚的情報と聴覚的情報がかなり多い。多量の視覚的情報と聴覚的情報とが迅速に得られる。

⇒肯定的な影響と、否定的な影響が生じうる。

肯定的な影響…乳幼児はテレビのショウ番組から言葉を効率よく学習する

否定的な影響…テレビの暴力場面を多く視聴する子供は実際に攻撃的な傾向を示す。